

わかちあいプロジェクト

NEWS No. 23

2007 DECEMBER



タイのミャンマー難民キャンプに届いた古着

私の夢、中学校にいけるように学生寮をつくること

Naw Lee Myar
ナウ リー ミヤーン

私の名前は、ナウ リー ミヤーンです。リーは光りという意味で、お祖父さんが私が人々の光になるようにとつけてくれました。両親は農民です。大豆、ニンニク、玉葱やコーヒーなど栽培しています。私は9人の兄弟と2人の姉妹があります。父と2人の兄は農作物を買い入れ業者に販売する仲買を行っていますが、市場が軍と仕入れ業者に支配されているため、仕事を続けることができません。私の夫は5年前、3人の子供を残して胃がんで亡くなりました。私の幼い子供が死んだのは生後2ヶ月でした。私は教会から5000 Kyats=500円を月給としていただいています。毎日の生活は大変です。しかし、いつか神の助けによってこの状況を克服したと思います。難しい問題が一杯ですが、家族と地域の人たちのために収入向上に努めたいと思います。

私の働きについて紹介させていただきます。1993年神学校を卒業し、1994年から2006年までカヤパプテスト教会の女性グループの幹事として働きました。裁縫クラス、手工芸、食品加工、小口貸付けなどのプログラムがあります。

ほとんどは人里はなれた農民で家族を支えるに必死で

す。両親が貧しいためにほとんどの子供は、中学校、高校を卒業できないで退学してしまいます。両親が畑仕事に忙しく、弟や妹の世話をしなくてはなりません。ある子供は家族を支えるために町に家政婦として働きにでます。そこでは様々な人権問題があり子供たちはその被害に会っています。

無学なために家族の世話の仕方を知らない年少のうちに結婚します。2005年から2006年まで人身売買から子供を保護するために地域のオルガナイザーとして働きました。私は多くの被害者のケースを知るにいたりました。子供たちは雇用主によって圧迫され虐待を受けています。多くは無学のためにこのようなことが起きています。

そこで私は子供たちに教育を与えることが何より重要だと思います。ほとんどの村には中学校、高校はありません。そのため小学校を卒業すると町の学校に行くための学生寮が必要です。この学生寮を作り維持することが私の夢です。どうか夢の実現のために皆さまご支援ください。よろしくお願いいたします。

古着支援プロジェクト

第16回 2008年度 古着支援要項

2008年も以下の要項に従って古着を集めます。ご協力、よろしくお願いたします。送り先と受け付け期間を間違えないようお願いいたします。衣料品以外のものは対象外ですので御了解ください。

●こちらに保管する場所はありませんので、各自そのときまで保管をお願いいたします。

2008年はタイのミャンマー難民キャンプ(9キャンプで15万6千人)の現地NGOとの協議の結果、大量に衣類が必要であるとのことで、目標を7000個に設定して、ご協力をお願いいたします。5歳以下の幼児の衣服が特に必要ですので、ご協力ください。

◎支援先: タイにあるミャンマー難民キャンプ

◎古着の種類: 子供と大人の衣類(夏冬ものすべて、特に5歳以下の幼児、5歳から15歳の子供の衣服が必要)ズボン、Tシャツ、スカート、ワイシャツ、ジーンズ、バック、トレーナー、ジャージ、カーデガン、セーター、コートなど。中学、高校などで使ったジャージが特に喜ばれています。

◎古着の状態: 洗濯に出したもので、あるいは自分で洗濯してアイロンをかけたものにしてください。

◎古着の個数: ダンボール箱、7000個(皆さん全員の支援目標です。40フィートコンテナ7台)

◎送り先: 〒143-0003 東京都大田区京浜島1-2-2 ヤマト(株)内(電話:03-3799-1921) わかちあいプロジェクト(現地への持ち込みも土日を除く営業時間内、月から金、午前9時から午後5時です。ヤマト便以外でもOK。古着に関する問い合わせはわかちあいプロジェクト:03-3634-7809まで)

◎受付期間: 2008年6月2日(月)~14日(土)(この期間に到着するようにお送りください)

◎ダンボール箱の大きさ: 引越し用段ボール箱大のおおきさまで(縦・横・高さの合計が1.5mまで)

◎送料募金のお願: ダンボール1箱あたり、1500円(日本から現地までのコンテナ輸送費、通関費用、現地の運搬費用)ヤマトの倉庫までの送料は募金とは別に各自ご負担ください。古着だけのご寄付は受けかねますので、よろしくご協力ください。(荷物と一緒にカンパを送られますと、そのまま現地まで送られてまいります。ご面倒ですが郵便振替でご送金ください)

◎現地受入団体: TBBC Thailand Burma Border Consortium <http://www.tbbc.org/>



●カンパ送金先
郵便振替口座 名称: わかちあいプロジェクト
口座番号: 00130-7-762258
(古着送料募金とお書きください。振替用紙は郵便局にあります) クレジットカードで募金ができます

2008年の募金目的と目標額

- 難民、国内避難民ほか支援 760万円
古着などのコンテナ費用
- ミャンマー学生寮建設 120万円
- カクマ難民キャンプと
タンザニア難民キャンプのため 120万円

募金目標額 1000万円

募金の送金先

郵便振替口座:
わかちあいプロジェクト募金
00130-7-762258

2007年度わかちあいプロジェクト 収支決算報告書 2007.4.1~11.30

収入	
前年度繰越	1,471,073円
コーヒー紅茶売上	16,622,878円
募金	5,770,374円
その他の収入	13,223円
貸付金戻り	1,045,315円
預かり金	93,991円
収入合計	23,545,781円

支出	
コーヒー紅茶ほか仕入	10,198,656円
支援 タンザニア	2,246,861円
タイ	1,212,790円
カンボジア	1,229,500円
その他支援	99,771円
税金	469,626円
活動費	620,243円
事務管理費	5,582,183円
貸付金	895,985円
借入金返済	585,600円
支出合計	23,141,215円
差引残(繰越金)	1,875,639円

☆別途: カンボジア学校募金 5.6万円積立
会計 網信幸

カンボジア学校建設募金

カンボジアの学校建設支援ありがとうございました。

わかちあいプロジェクトは、1994年から約4年間実施した、カンボジア帰還難民のための牛のプロジェクトの次に、より長期的な教育支援という視野のもとに学校建設支援を行いました。

1999年から2004年まで、6回にわたり、カンボジアのパートナーNGO.LWFの協力をえて、ワークキャンプを実施し、日本からのボランティアが現地の村人とともに学校建設に参加する機会を作ってきました。建設作業以外でも村の人との多くの交流があり、参加者たちはカンボジアの村の生活などを実際に体験し、多くのことを吸収しました。

その後お寄せいただいた募金1万ドル(120万円)を本年現地に送金し、最後の学校建築を支援いたしました。

カンボジアでは多くのNGOが活動し、タイや中国の資金も



2007年10月 建築現場に集まった子供たち

入り、私たちが支援を始めた1994年とは格段の感があります。農村部は発展からおくれ教育も十分ではありませんが、今回でカンボジアでの支援を終えて、来年からは、ミャンマーで教育支援を行いたいと準備しています。

発行 / 2007.12 (年1回発行) わかちあいプロジェクト 130-0022 東京都墨田区江東橋5-3-1 電話: 03-3634-7809 FAX: 03-3634-7808
編集者 / 松木 傑 郵便振替口座: わかちあいプロジェクト募金 00130-7-762258 (募金用)
デザイン / Design Convivia わかちあいプロジェクト 00180-6-758331 (代金支払用)

カンボジアからミャンマーへ

現在、アジア学院の研究生として来日している Naw Lee Myarさんと協力して教育の機会に恵まれない子供たちのために支援事業を計画しています。



ナウ リー ミヤーン

- 支援先：ミャンマー、カヤ (Kayah) 州
州都 ロイカオ (Loikaw)
- 一期事業計画案：2008年6月～2010年12月
 - ・2008年度 学生寮建設のための土地の取得
 - ・2009年度 学生寮の建設と運営の開始
 - ・2010年度 事業の運営と新計画の立案
- 目標募金額：各年度1万ドル (120万円)



フェアトレードプロジェクト

タイのフェアトレードコーヒー10年の取り組みについて

わかちあいプロジェクト代表 松木 傑

出会いからはじまった、タイ山岳の村でのフェアトレード

1989年11月 私は、当時働いていました日本キリスト教協議会国際協力担当幹事として、タイとインドのスタディーツアーを企画して、9名の参加者がバンコック、チェンマイ、カルカッタ、マドラスの四都市を訪問しました。チェンマイでは、大学の先生や牧師たちと懇談会を持ちました。村の教会の課題は何ですか、という問いかけに対して神学校の先生が、教会員が娘を売るということである、と言われたのを忘れることができません。タイの山岳地の少数民族は、貧困のために娘を売るということは聞いていましたが、教会の中まで広まっているとは思っていませんでした。

その後、チェンマイから北西70キロ山岳に入ったカレン族のボウゲオ村で一泊しました。夕方、民家の高床の部屋で夕礼拝がもたれ参加しました。村人はすべてバプテスト教会員でその熱心さに感銘を受けました。翌朝目覚めて近くを散歩したところ、コーヒーをゴザの上で乾燥させているのを見て、「こんなところでコーヒーを作っているのだ」と思いました。

1993年春から、メキシコのコーヒー、カフェマムの販売を始めました。まさか、自分がコーヒーを取り扱うなど考えてもみませんでした。以前、カレンの村で見たコーヒーのことを思い出し、貧困のために娘を売ると

いう状況に、何か出来ないか、コーヒーをフェアな値段で買うことによって貢献できないかと考えるようになり、1996年11月、チェンマイのパヤップ大学の知り合いに連絡しました。そしてコーヒーに詳しい人として紹介されたのが、アメリカ人宣教師のリチャード・マンさんでした。なんと、彼は私が以前訪問したボウゲオ村で麻薬患者の更生施設を運営するかたわら、同じ敷地でコーヒー栽培を行っていました。

マンさんは、心強いパートナーとして、タイ山岳民コーヒー組合の設立に取り組んでくださいました。アメリカのバプテスト教会から派遣された農業専門の宣教師で、数年前に引退され、現在は、同じ農業開発を専攻する息子のマイク・マンさんが、その働きを担っています。

1997年4月最初のタイのコーヒーの生豆1トンが届きました。マンさんの農場から400キロとチェンマイ大学の農園からの600キロです。国連がタイの麻薬栽培に代わる換金作物として、コーヒーを導入するために、コーヒーセンターを設置し、その働きを大学が引き継いでコーヒー園を運営していました。

その後3年購入し、8トンまで購入した時点で、私の教会の倉庫に在庫が一杯の状態になってしまいました。タイのコーヒーは、日本でほとんど知られていません、私たちの売る力は限られています。切羽詰ってしまいました。

チェンマイのラナカフェのスタッフ



日本で駄目なら、チェンマイで売ろう

コーヒー・ショップをチェンマイではじめる準備に取り掛かりました。2001年1月、わかちあいプロジェクトのスタッフ1名とボランティア1名、それに私の3名で小型のコーヒー焙煎機、コーヒーグラインダー、コーヒーのパッケージ袋、シーラーなどもてるだけの機械類と材料をもって入国しました。事前にタイの英字新聞に求人広告を掲載し、履歴書をメールで送ってもらった3名の方とチェンマイのYMCAで面接して、1名をコーヒー・ショップ、「ラナカフェ」のマネージャーとして採

村でコーヒーづくり10年の実績を持つブンラットさん(左)。アメリカ人宣教師で農業開発の指導者リチャード・マンさんの息子マイク・マンさん(右)。マイクさんがリチャードさんの後を担っている。



カレン族ソンポイ村のネーさん



焙煎機 3号機と2号機

持参した焙煎機(上)現在の焙煎機(下)



コーヒーを飲む習慣が広がり、コーヒー・ショップができてきていますが、「ラナカフェ」は先駆的な役割をチェンマイで果たしています。チェンマイの空港でも私たちの焙煎コーヒーが販売されています。

1998年にはタイ山岳民コーヒー組合は、フェアトレード・コーヒー生産者として登録され、世界各地から引き合いがあるようになり、2007年11月現在、組合のメンバーは16グループで280人に増え、30の村から150トンが集荷されるまでに成長しました。

私たちは、「教会のコーヒー」という名前で販売しています。また、スーパーのイオンでも、同じタイのコーヒーを販売しています。スターバックスも今年はタイの豆を本格的に販売開始するそうです。山岳民の方たちの収入を増やすことに貢献してきたと思いますが、まだその役割についてはまだ検証できていません。10年を経てその時期ではないかと考えています。村人が娘を売るという状況が少しでも改善されているでしょうか。

検証のための訪問

2007年11月26日から30日まで、久しぶりにタイを訪問し、2号店の開店式とラフー族のパカ村とカレン族にソンポイ村を訪問し、コーヒーの役割と村の状況、それに、娘を売るということが、現在でも続いているか質問しました。

パカ村のラオサンさんは、夫婦と子供2人の4人家族ですが、100%ちかく収入はコーヒーに頼っています。マカデミアナッツもいくらか栽培されていますが、国立公園内に村が位置しており、農地を広げることができません。農地18ライ(1ライ=1600m²)で6年前からコーヒー栽培をはじめ、パーセント付で1000Kg、40万円の収入になり、子供も小さいので収入は十分だとのこと。他の

村人の話では、自費で子供たちを高校にやった人はいないということで、コーヒーだけの収入では限界があるように思いました。

パカ村は高度が1040m、ソンポイ村は1140mでパカ村ではコーヒーが熟していましたが、ソンポイ村は高度が高いため寒く、まだ熟していませんでした。ネーさん、47歳は娘3人と奥さんの5人家族です。村は国立公園の中にありますが、歴史が古く100年以前に入植したとのことで、土地が比較的恵まれ、米、高原野菜、コーヒーの3品がバランスよく栽培でき、奨学金で娘一人が教育を受けたが、他の2人は自力で看護学校と大学に行かせることができたそうです。村でのコーヒー栽培の歴史は、1985年に国連によりコーヒー栽培が奨励され開始され、1995年にマーケットが無くて切り倒したが、2003年、タイ山岳民コーヒー組合に加盟してコーヒー栽培を再開したそうです。昨年11月、組合を通して、スターバックス・タイから支援を受けて、貯水タンクを設置し、来年は診療所の建設と医師派遣が予定されています。

両村ともテレビ、バイク、小型トラックなどがそろっており、ゆったりした村での生活は安定しているように思いました。組合活動は、16グループの代表が年3回集まり、お互いにコーヒー栽培の情報を交換し、自ら話し合っ、コーヒーの取引条件を決めるなど自主的な働きを行なっています。今年の組合員への支払は、1キロあたり105バーツ(1バーツ、3.6円=378円)で、国際相場より大変高くなっています。タイ国内でのコーヒーの需要が高まっていることと、海外からのコーヒー豆の輸入にたいして90%の関税を課して国内のコーヒー生産者を保護しているためです。タイ山岳地でのアラビカコーヒーの栽培量は約800トンで、そのうち組合では2008年に200トンの集荷を計画しています。

コーヒーの取り扱いを始めて10年、村の現場で働いてきたブンラットさんに、村人が娘を売るということについて質問しました。コーヒー組合の16グループ、30の村では、もともと娘を売ることはなかったが、近隣の村では、そのようなことが少しはあるようだが、しかし、それは両親が娘を売るというのではなく、娘たちが村での生活を捨てて都会に出て行った結果起こっている、これが彼の答えでした。